

近世説話の生成一斑

——菊岡沾涼『諸国里人談』・『本朝俗諺志』と地誌——

真 島 望

一

近世文学史において、浮世草子の衰退から前期読本の誕生までの間隙を埋めるものとして、享保から宝暦期に簇生した「奇談」群を想定することがある（文昌軒紫橋作『翻書籍目録』〔宝暦四刊、以下「宝暦目録」という〕の分類項目による¹⁾。これは、幕府の政策に端を発する享保期の学問奨励・庶民教化の気運の高まりの中で生まれたもので、「語り」に重きを置いた教訓・啓蒙的な内容をもつものであった。

しかし、その「奇談」書に含まれる菊岡沾涼（享保期に活躍した俳諧師・雑字家²⁾）による説話集『諸国里人談』（寛保三刊、以下「里人談」と略記）とその統編『本朝俗諺志』（延享四刊、以下

『俗諺志』と略記）は、当代のその他のものとは内容的に少しく異なる印象がある。すなわち、他書に比して直接的な教訓的言辞や、作者による批評が圧倒的に少なく、それがまた沾涼説話作品の特徴ともいえるほどなのである。

本稿では、その作成過程の一端を窺うことにより、沾涼によるこれら二書の独自性、或はこれが「奇談」書として扱われたことの意味などについて若干の考察を試みたいと思う。

二

まずは「里人談」・「俗諺志」が先行研究において、どのように位置づけられてきたのかを見ておくこととする。

まず、水谷不倒は、「里人談」について、

日本全國にわたり、神社佛閣・名所舊跡に傳はる縁起、即ち古傳説の由來を蒐集したもので、材源は歌枕・名所記、其他の諸書から採集してゐる。尤も著者は地理學者であるから、自家の見聞の加つてゐることはいふまでもあるまい。併し著名なものは、大概諸書に記されたものばかりで、當時に於ても決して新味のある書とはいへない。ただ能く類聚した點が價值である。記事は性質上頗る簡單で、趣味に乏しいが、我傳説・風俗の研究資料として待つべきものであらう。

と述べた。沾涼の説話作品に直接言及した数少ないもの一つだが、文学的價值は認めていないようである。

以後は、もっぱら他の文学作品の典拠として指摘されるのみであった。中村幸彦氏は『里人談』卷之三「山野部」の「立山」が上田秋成の『春雨物語』（文化五成「焚燐」）に、尾形仍氏は同じく卷之三「山野部」に見える「涎水」が、読本の祖たる都賀庭鍾著『英草紙』（寛延二刊）第一卷第一篇「後醍醐の帝三たび藤房の諫を折く話」の、東国の田夫が藤房に逃水のことを説明するくだりに、それぞれ材を提供したのではないかと述べておられる。

その他、草双紙の類に材を提供していたことが多数報告さ

れており、一例を挙げれば、中山右尚氏が鳥居清経画の青本作品『鍔金紙屑』（安永四刊）上冊が、井原西鶴著『西鶴織留』（元禄六刊）三・三とともに、『里人談』卷之五「器用部」所載の「無間鐘」を素材としているということを説明されてゐる。

これ以外にも、紙幅の都合上詳細には触れないけれども、『里人談』・『俗談志』ともに相当数の青本・黒本の素材となつていたのである。

近年では『里人談』に登場する妖怪に着目した論なども発表されているが、本論において重要なのは飯倉洋一氏による指摘であらう。先に述べた「奇談」による文学史の再検討をされた「奇談から読本へ」において、

やはり四作入っている俳人菊岡沾涼の著作は、いずれも啓蒙的な書で、諸国の民俗的事象や和漢の故事についての知識を開陳したものであり、いわゆる奇談とは異なっているが、たとえば『諸国里人談』は、諸国遊歴中に集めた話ということで、(中略) 諸国咄的な形式に、知識啓蒙を織り込んでいたのであり、「談」に重点があるといえよう。

と述べられている。氏は「『談』に重点がある」という点に

において、『里人談』が「奇談」に含まれることを妥当としておられる如くである。

以上、『里人談』・『俗諺志』ともに作品自体にいわゆる文学的価値が認められているわけではないものの、後続の多くの作者に影響を与えていたとすることができる。特に新興のジャンルである前期読本作者に用いられていたことは、その文学史的意義を考える上で重要であるし、また、冒頭で述べた如く、一方では「奇談」として、読本誕生の素地を作った一群の一書として位置づけられているわけで、やはり軽視すべからざる価値を有していると考えざるべきではないだろうか。

三

それでは、具体的に『里人談』・『俗諺志』の特徴について検討してみたい。

『諸国里人談』は、寛保三年江戸池田屋源助・同須原屋平左衛門板、半紙本五卷五冊、自序、無跋。大別して寛保三年刊の刊記をもつ初板本と、寛政十二年の再板本（覆刻本）との二種が存在する。しかし、精査するにどちらにも更に後印本が存在することがわかる。^⑩

その続編たる『本朝俗諺志』は、延享四年江戸池田屋源助・同須原屋平左衛門板、半紙本五卷五冊、自序、池田屋二西堂（板元に同じ）跋。管見の限り『里人談』のような明らかな再板本は無い。

『里人談』の沾涼序文には、「不_レ直_レ採_キ有_レ儻_ニ与_レ里人_ノ談_ヲ」^{モリガタリト}とあり、各話が実際に土地の者が語ったものであるということを主張している。著者は日頃そのような聞き書きを収集していたようである（その国々の俗談を五つ三つ書あつめたるを）（『俗諺志』序）、それは「故諸国名山・旧跡・人物・奇異及故事・因縁、普_ク日日記、月々集し草稿、文箱堆し。」（『俗諺志』跋）という刊行者池田屋源助の言からも窺うことができる。

また、同じく『俗諺志』跋文の、

怪談・百物語の類書、牛に汗し、棟に充つ。しかはあれど、皆往古の談にして、今や現ならず。頃日編集、五冊者、米山翁（沾涼の別号——稿者注、眼前見、亦是其地の人に委く温問て、正説顯然たり。

という強調ぶりからは、世間に流布する怪談・百物語の類とは、その信憑性において一線を画しているとの意識を、著者・刊行者がもっていたことを思わせる。

もつとも、現実性の強調というのは、この時期の怪異説話集や百物語系の説話集に共通する傾向であり、特筆すべきことではないのだけれども、著者沾涼が自身の説話集を実談にもとづく「実話」であると主張していることは指摘しておく必要がある。

「里人談」は全百七十六話を、「一 神祇部」・「二 釈教部」(以上巻之二)、「三 奇石部」・「四 妖異部」(以上巻之三)、「五 山野部」・「六 光火部」(以上巻之四)、「七 水辺部」・「八 生植部」(以上巻之五)、「九 気形部」・「十 器用部」(以上巻之五)の十部に分類し、目録では各話の題名の下にその説話の舞台となっている国名を附記する。一方、「俗諺志」は全百三十六話で分類はなされず、国名も各話の題名中に組み込む形式(「武州玉川氷」をとって、前集との統一感に欠ける印象を受ける)。

説話の収載範囲は、両書合わせて日本全国のおよそ五十五箇国に及び、摂津が二十五話と最も多く、次いで武蔵(二十一話・相模(十九話)・山城(十六話)・信濃(十四話)と続く。

各話を内容別に分類することは、『今昔物語集』・『古今著聞集』などの例を挙げるまでもなく、説話集としては伝統的な処置であるが、同時期の説話集(『宝曆目録』「奇談」所載のもの

のなど)にはあまり見ることがない。

かかる分類の源流は、大陸の類書にあるのだろうが、時系列的に考えるならばむしろ、ここでは元禄から正徳にかけて、相次いで刊行された宮川道達編『訓蒙故事要言』(元禄七刊)・青木鷲水編『和漢故事要言』(宝永二刊)・平住専庵編『分類故事要語』(正徳四刊)などの和製類書の流行の中で捉えるべきではないか。この類書への接近も「里人談」の大きな特徴の一つである。

しかし、沾涼による説話集の最も重要な特色は、そのへ地誌」的な編集態度であった。

それは「奇石部」・「山野部」・「水辺部」のごとき分類項目からも窺うことができようし、その他の部の内容も、あたかも道中案内記か地方地誌であるかのように、諸国の神社・仏閣・名山・名水を中心に項目を立て、それに付随する形で縁起や由来に関する説話が語られている。そして、各項目・各話の分量は、半丁にも満たぬものがほとんどで、余計な描写を極力排除した簡潔を旨とする記述態度も地誌と共通する。また、前述のように目録に国名を記すということ自体、それぞれの話や名所・旧跡の所在(話の具体性・信憑性に関わる要素)に力点が置かれていた証左と言えるよう。

ただ、これは近世中期の江戸地誌として屈指の質の高さを誇った『江戸砂子』（享保十七刊）の編者沾涼の作品としてはむしろ当然のことといえるかもしれない。そして、それが他の説話集と一線を画す要素の一つとなっているのである。

『宝暦目録』『奇談』所載の他の説話集と比較してみよう。百物語系の怪談説話集というのは、その性格上全国各地の怪談を収めるものであるが、祐左著『太平百物語』（享保十七刊）・烏有庵著『万世百物語』（寛延三刊）なども、その話の舞台となる地名などは記すが、話の進行上の必要が無い限りは土地の事物について細々と述べるといふことはない。また、それらとは少し毛色の異なる如翁著『虚実雑談集』（寛延二刊）や酔雅子著『著聞雑々集』（宝暦二刊）などにも、地誌的な要素は無い。

特に好対照なのが静観房好阿著『諸州奇事談』（寛延三刊）である。書名こそ『里人談』に酷似するものの、内容による分類や、目録における国名の明記もなされず、各話の分量も概ね三〜四丁で同時期の怪談ものの説話集などと同様である。また、粉本利用の態度から窺われるその編集方針は、近藤瑞木氏によれば、原話に教訓性を付与したり、靈験談としての意味を加えるといったもので、著者の主観性が強く反映して

おり、先に述べた『里人談』・『俗諺志』の性格とは大きく異なっていると云うことができる。

『俗諺志』跋文（刊行者池田屋源助による）には、「先生（沾涼のこと）稿者注は、多年、地理志厚」とあつて、当時沾涼が地誌作者として認識されていたことがわかる。また、この引用部には、先に引用した「故諸国名山・旧跡……」が続くのであるが、これらのことは、製作者サイドも『俗諺志』（すなわち前編たる『里人談』も含む）には地誌の趣があると捉えていたということを示している。

また、『里人談』の再版本には、多くの名所図会もの（都名所図会〔安永九刊〕・大和名所図会〔寛政三跋刊〕・撰津名所図会〔寛政八〜十刊〕など）を著した秋里籬島による跋文が寄せられており、籬島が同じ地誌作者の先達として沾涼を意識していたことが窺えるけれども、これも『里人談』・『俗諺志』がいかにか受容されたかを考える上で示唆的である。

四

見てきたような地誌的な特質はどのように醸成されたのか。実際の説話収集・生成の実態を著者沾涼の自筆資料二点（故

郷の水」(享保十八成)・「熱海志」(延享元成)を手がかりに考察しつつ探ってみたい。

『故郷の水』(木津保之氏田蔵)は半紙本一冊、沾涼自身の筆による稿本で、表紙中央の題簽に「故郷の水」と書名が記される(これも沾涼の筆跡、図1)。その成立に関しては巻末の識語に「享保十八のとし五月雨のころ菊岡沾涼みつから書之」とあつて明瞭である。なお、書名は自作句「故郷の水は乳の味さらふ酒」による。

内容は「所用」のために京に上った際の道中記、紀行文。享保十八年三月五日に江戸を発ち、同年四月二十九日に帰着するまでに訪れた地の名所・旧跡や故事などを詳細に記録しており、他書には見えぬ自作発句も多数記されていて、芭蕉など先人の紀行文を強く意識していることが窺われる。また、途中自身の郷里である伊賀上野に立ち寄っているのであるが、その際の記述からは沾涼の交友・親戚関係などを知ることができ、その点からも大変貴重な資料であるけれども、現在は散逸してしまっている。

一方、『熱海志』は武田科学振興財団杏雨書屋の所蔵(請求番号 乾五九三〇、図2)。半紙本一巻一冊、外題・内題ともに「熱海志」で題簽の書名、本文は同筆と思われる。全十五

丁の小冊子で、序跋文を欠くが、奥書(本文同筆)に「延享元甲子の秋入湯の御熱海におゐてこれをかきぬ」とあつて成立の事情は明らかである。

奥書にあるように、本書は沾涼が湯泉場で著名な熱海に遊んだ際に著した自筆本であり、当地の名所・旧跡のほか温泉の由来などを極めて丹念に筆録していて明らかに地誌に傾斜したものとなつている。内容のみならず記述様式にもその傾向を窺うことができる。すなわち、文章が連綿と書き記されるのではなく、箇条書や事項の羅列が多いのである(後の引用や図版をご覧いただきたい)。これはやはり沾涼の著作たる地誌『江戸砂子』の版面と共通する点であり、内容と相まって本書が地誌として著されたという印象を強めている。この点、俳人の紀行文としてもされた『故郷の水』とはいささかその性格を異にしており、自作句や和歌も載せるものの、その数は少ない。

なお、喜多村筠庭編『筠庭雜録』(天保三以降成か)には、「崔下菴が熱海志といえる温泉のことかける草稿あり、いまだ板行にはならぬもの也」との記述があり、未刊行ながら本書の存在が知られていたことがわかる。

この二書は、それぞれ沾涼自身が実際に旅をした際の記録

であつて、しかもこの中に見える記事から「里人談」・「俗諺志」への流用が指摘できるのである。

A 「故郷の水」↓「本朝俗諺志」

文体などは改められているが、それぞれ「故郷の水」が取材源となつているのは明らかである。いずれも著名な名所・旧跡であり、諸書に散見する（三輪山については早く記紀にも記述がある）ため実見しなくとも叙述は可能であるけれども、例①の「井出の玉水にやどり求ぬ」や例②における「三輪旅泊よき所也」といった言を信すべきだろう。

例③の伊賀大仏は貞享五年初春に芭蕉が訪ねており、「笈の小文」（宝永六刊）に該当する一節がある（なお、記述の相違する同内容の俳文（「伊賀新大仏之記」）も「芭蕉庵小文庫」（元禄九刊）に収録されている）。内容はその荒廃ぶりを嘆くというもので、「俗諺志」の記述はこれにかなり近いものの、「近世僧あつて……」以降は「笈の小文」にはまったく見られない。従つてこれは沾涼が独自に加えた記事であり、それに合致する記述が「故郷の水」にある（「近世勢陽の比丘」以降）以上、少なくともこの箇所は、沾涼が実見した際に得た情報にもとづいて書いたのだと考へて差し支えあるまい。

【例①】

『俗諺志』	『故郷の水』
<p>山城井堤<small>イヱガ</small>の玉川は、奈良海道玉水<small>なごろ</small>といふ所にあり。山吹・蛙の名所なり。むかし、井堤の大臣、別所の地也。『無名抄』ニ云、井堤の大臣の堂は、ひと、せ焼侍りにき。その前におびたゞしく大きな山吹むら／＼見え付き。その花のりんは、小土器<small>こぢぎ</small>の大きさにて、いくへともなくかさなりてなん侍りしと云々。</p> <p>（巻之一）「奥州玉川玉泡」</p>	<p>これより川船にのりて泉川みかの原を過、狛のわたりにて船よりおりて井出の玉水にやどり求ぬ。井出の玉川は玉水の入口の小川也。東の方五丁斗に橋諸兄公弟（第一）カ——論者注）宅の遺址あり。水石猶存す。玉の井猶存せり。此所は山吹蛙の名所也。しかれども山吹はみえず。</p> <p>（京への所用の途次）</p>

<p>【故郷の水】</p> <p>平松のこなた海道より少左の山陰に大仏あり。伝言ふ南都東大寺の十分の一の像を俊乗坊彫刻し玉ふ。むかしの堂は源頼朝公建立の所也。天正の乱に灰燼と成りてみくしはかり残り。年来そのままにてありしか、近世勢陽の比丘、法海の他力を以て御くしをつき仏鉢</p>	<p>【例③】</p> <p>【俗諺志】</p> <p>和州三輪の鳥井は、二柱<small>はせ</small>の左右に、一段低き鳥井有。二つとも扉ありて門す。是を三光の鳥井といふ也。祭神、大物主神也。御鎮座神、代大和神是也。<small>社額百十五号</small>当社は、拝殿ばかり社なし。本社は、山を云。杉の木立茂りたる小き丸山也。</p> <p>(卷之二「大和<small>やまと</small>三輪<small>みわのちりみ</small>鳥井」)</p>	<p>【例②】</p> <p>【故郷の水】</p> <p>すぎもく川をわたり三輪旅泊よき所也。明神八町より北の方、山の麓にあり。本位はなし、拝殿のみあり。拝殿のうしろに鳥井あり、三光の鳥井と云。鳥井の左右に又、鳥井ありて三ツ也。則これに扉をして鎖す。日、月、星を象るゆへ此名あり。社職のいへり。又、後の山は神鉢なりと云。まん丸に茂りたる山也。</p> <p>(京への所用の途次)</p>
--	---	---

<p>【俗諺志】</p> <p>伊賀国山田郡阿波村の大仏は、俊乗坊長源の建立、南都東大寺の三分一の像也。金仏なりしが、破壊して、御頭ばかりなりしが、近年僧あつて、御骸を木にて作り、仏鉢具足せり。爰に俊乗坊の御影あり。雨乞に、御影を川にて浴せんと期し昇出し、雨たもれすんじやう坊と、はやしもて行に、極て南の方馬野村といふより黒雲おこりて、川まで行ざるに、大雨する也。時として餘りつよくふりて、却て田畑を損ずる事あり。依之大方の時は、祈らず。</p> <p>○此所に石仏の不動尊あり。立像一丈余あり。山岨の</p>	<p>【故郷の水】</p> <p>具足まさに成就せり。猶一字を建立せんことを発して、柱舛形大せうととのひたり。然るに当巳の春、子細あつて退院せられたり。屢石座のみ礎ハ夏草に埋れてあはれを見す。嗚呼、又、何ん人そいつれの時におこさ、らんや。(発句略)</p> <p>後の山岨に高六七間、幅五間計の一枚の大石あり。少屈虚なる中に不動の立像いづばいに彫たり。凡作とはみえず。巖の上はすぐに山につらなり、松柏の老樹枝を垂して類ひなき景色也。</p> <p>傍の小堂に俊乗坊の御影あり。此像へ雨を祈るに其驗あらずといふことなし。ふしきの霊像なり。</p> <p>(伊賀から江戸への途次)</p>
---	--

『俗諺志』

大石に彫付、岩窟のごとく雨露のわづらひなし。弘法の作と云。

(卷之三「伊賀大仏」)

B 『熱海志』 ↓ 『本朝俗諺志』

『故郷の水』の流用ぶりよりも、もとの資料の表現をそのまま使用しているものが多い。既述の如く、『熱海志』はその書名・内容から明らかに地誌であり、それをほぼ手を加えず使用すれば、その結果として成る説話作品は自ずと地誌性を帯びることとなる。

【例①】

『熱海志』

一、來宮大明神社 町より三・四町山手にあり。
祭神大己貴命 五十猛命
熱海の産土神也。和同三年六月十六日鎮座。
一夜に六本の楠生る。神前左の方に一本あり。
六・七抱あり。西の角半町斗上に一本あり。十二抱半あり。老木にて根は椋に成りて、いろくくの奇生有。類ひなき大樹也。今二本は合間にあり。残り三本は朽てなし。株所々にあり。

(五才)

『俗諺志』

豆州熱海の鎮守來宮大明神の神木は、楠也。周リ十一抱半あり。至極の老木にて、梢は朽て、種々の奇生あり。幹は椋になりて、大きな洞のごとし。人三十六人居並ぶと云。めづらしき大樹也。其外七・八抱の楠数あり。

(卷之三「大楠木」)

【例②】

『熱海志』

湯持二十七軒、古來より定する也。旅人は是に舍る。本陣三軒有。湯料・座敷料一七日鳥目二十文を定法とす。
温泉の本源は磯より二町余山手町の中にあり。方十間ばかりに矢來し、木戸・貫木常に鎖す。涌所は滑石二・三十かさなり、常は水なし。昼夜に六度涌出る。煙は雲と變變、音は雷のごとし。煙につ、める湯は雲しらぬ雨とくたりぬ。(発句略)
刻限、卯・巳・未・酉・亥・丑の刻也。すこしの遅速はあれとも、大やう違はず。潮の熱湯也。味ひ鹽し。楠を以二十七軒の湯持家々に是をとる。皆内湯也。

(一才一ウ)

『俗諺志』	『熱海志』
<p>○今大路道三試て、竹三本、前後に節をこめて、温泉に浸し、一七日過、一本をわれば、湯少あり。二七日に半通る。三七日はいつばいに満たり。</p> <p>(卷之四「熱海温泉」)</p>	<p>一、今大路古道三試之 竹三本前後に節をこめて温泉に浸す。一七日過て一本をわれは湯少あり。二七日には半通る。三七日は悉く満たり。</p> <p>(二ウ)</p>

【例③】

『俗諺志』
<p>豆州加茂郡熱海の温泉は、平等に涌す。昼夜に六度涌出る也。磯より三町程山手、町の中に、方十間斗に矢来し、其内に涌所あり。少凹める所に滑石二・三十かさなり、常は水なし。卯・巳・未・酉・亥・丑の刻、極めて涌出る也。地中より、立浪のやうに涌上り、音は雷のごとく、煙は雲と變變、煙につ、める湯は、小雨のごとく四方へ降る也。潮の大熱湯也。味ひ塩し。是を元湯と云。桶を以湯持二十七軒の家くたどる也。二・三町がほど流れ来るといへども、猶熱湯のごとし。万病を治す関東の名湯也。</p> <p>(卷之四「熱海温泉」)</p>

『熱海志』
<p>一、方齋湯 松輪にあり。石六ツ七ツかさなる所。常は水なし。石にむかひ「清左衛門甲斐なし」と高聲によへは、則涌出て暫かほと流る、事細川のごとし。いかなる者のいひはしめけん。箱根の清左衛門地獄といふあり。所右のごとし。</p> <p>方齋といふ事實永のころ、方齋といふ狂人の法師あり。江戸の町に路を狂ひ奔る。わらんへあつまり「氣違よ、方齋よ」とはやせは、異形にして人の笑ひをかさねしむ。それより氣違の名目となれり。此湯はやされて涌出るゆへに名付たるもの哉。</p>

【例⑤】

『俗諺志』	『熱海志』
<p>○智恩院大僧正往的和尚、試て草花のしほれたるを涌出る湯に入ル時、芬をあけて、ささだしのごとし。</p> <p>(卷之四「熱海温泉」)</p>	<p>一、京智恩院大僧正堅誓上人往的和尚試之草花のしほれたるを涌立ル。湯に入ル時、芬をあけて咲出しのごとし。</p> <p>(二ウ)</p>

【例④】

『俗諺志』	『熱海志』
<p>其外、少づ、不断湯のわく所多し。味噌の湯など、大豆をひたし置に、ほどよくゆだる也。</p> <p>(卷之四「熱海温泉」)</p>	<p>一、水湯坂口にあり。潮なし。此湯に味噌大豆を入れるは、程よきに煮ゆる也。所の人、此湯にて味噌をつく也。俗に味噌の湯と云。</p> <p>(四才)</p>

【例⑥】

『俗諺志』	『熱海志』
<p>○少傍に、方齋湯と云あり。是も水なし。少の凹みに、石四つ五つありて、流の溝を付たり。此石にむかひ、清左衛門と高声によば、れば、大きに湯涌出、溝へ流る、事、川のごとし。</p> <p><small>清左衛門にかきらす伊云 てもわく地、所のひき也</small></p> <p>方齋湯わかせてみせよほと、ぎす</p> <p>(卷之四「熱海温泉」)</p>	<p>方齋湯わかせてみせよほと、ぎす</p> <p>(四ウ、五才)</p> <p>米山</p>

『俗諺志』	『熱海志』
<p>伊豆権現は、加茂郡に立。神木<small>榎</small>の木、凡三周<small>リ</small>、高十丈ばかり、葉厚く堅に筋あり。此葉を所持すれば、災難を通ると守袋に納む。又、女人、鏡に敷則夫婦の</p>	<p>一、伊豆権現は熱海より十八町小田原の方也。海道より石階を登り事二町斗。</p> <p>走湯山大権現</p> <p>祭神 天忍穗耳尊 照玉明神</p> <p>本地阿弥陀仏</p> <p>遍照権現</p> <p>祭神 捲幡千々姫 相殿</p> <p>本地薬師佛</p> <p>本社の廻り石の瑞籬左右に蘇鉄七本あり。皆四尺周り余。高八・九尺。</p> <p>椰木 神木也。本社<small>の隅</small>にあり。</p> <p>凡三抱高十余丈。</p> <p>往古楠山といふ節、松葉仙人住<small>る</small>。此仙人の植し椰の木也と云。古々井の森、やしろの右の方。</p> <p>社領三百石 別当般若院 真言古儀</p> <p>十二坊 山伏七軒</p> <p>むかしは三千坊ありといふ。當山の修験は、伊豆山一流にて大峯に属せず。</p> <p>(十一ウ)</p>

【例⑦】

『俗諺志』

中むつまじきと也。此木、他国に稀也。
 走湯山大権現ト云。祭神天忍穂耳尊
社類三石
 遍照権現 祭神 拷幡千々姫
 古々井の森やしろの右の方也。
山伏七平院
 当山の山伏は、伊豆一統にて、大峰に属せず。
山伏七平院
 (卷之四「伊豆山柵」)

右のような自著を利用した事例はその他の沾涼の刊行された作品でも指摘できる。すなわち、地誌『江戸砂子』(享保十七年江戸万屋清兵衛板、半紙本六卷六冊、自序、自跋・俳論書『鳥山彦』(享保二十一年江戸西村源六郎板、半紙本甲乙二卷二冊、彫工大久保一富、自序、自跋)である。どちらも『里人談』・『俗諺志』に流用されているのだが、ここでは、後者に見えるもののみ挙げておく。

C 『鳥山彦』↓『諸国里人談』・『本朝俗諺志』

例①・②いずれも沾涼が鹿島詣でをした際の旅がもとになつている。例②に「紀行の句は省こゝれよりやす之」とあることから、この時に編まれた『故郷の水』の如き紀行文が存在したということも考えられる。

【例①】

『鳥山彦』	いにし卯のとし(享保二十年か―論者注)総の下州に至り、かしまに詣る事あり。海なき国は扶桑に多しといへども、山なきはあらず。この国はみなひら山にして、峯ある山はなし。 (甲巻)
『俗諺志』	又、山なし山と称するは、みな平山にて、一町と登るはなし。増して峯高根といふ山は、一ヶ所もあらず。土は、赤土のへな更り也。諸国に海なき国はあれども、山なき国は、当国にかざるべき也。 (卷之一「玉前寄石」)

【例②】

『鳥山彦』	かしまにて「紀行の句は省之。」(発句略) 息栖の浜の女瓶・男瓶は海中にあり。その中なるうしほ、ひがたにはさみづとなりてのこるよし。これなん、忍塩井の水と云。 (甲巻)
『里人談』	常陸国息栖明神の磯ぢかき海中に、女瓶・男瓶とて二ツの奇石あり。男瓶は径一丈あまりにして銚子のかたち也。その口とおほしき所に溝あり。中は控のことく

『里人談』

窪みて鍋の形也。女瓶はわたり五六尺はかり。土器に似たり。土俗曰、これは神代の銚子土器なりと。此石満潮には三尺沈めり。干潟には水上にあらはれける。その銚子の中は素水にして、潮の味ひなし。これ忍塩井の水といへり。

(卷之二「息栖瓶」)

また、これらの他にも実見にもとづいている可能性が濃厚な話がある。すなわち、『里人談』卷之二「姨石」には、信州姨捨山にある姨石なる物の由来を述べた後

予一とせおはすて山へまかりける時、

姨捨は昼でも夜のこゝろかな

沾涼

と、発句を記しているけれども、詞書からわかるように沾涼が実際に彼の地を訪れた際の吟なのであった。後年門人に贈った俳諧作法などについての覚書である「菊岡沾涼誹諧卷」

(延享三成、早稲田大学図書館蔵)にも

姨捨は昼でも夜の心かな

元文四七月朔日信州にての句也

とあり、その日時までも明記されているのである。

以上、著者沾涼が実際に訪れた際の情報を、説話作品に反

映させている事例を見てきた。その情報収集には様々なパターンがあつたろうが、『故郷の水』には「駕丁の物語ハ箸の長者の屋敷の跡なりといへり」とか「これを云ふと駕丁のかたる信用しがたし」などとあつて、その実態を窺わせる。いづれにせよ、もちろん、その内容に多少の誇張はあろうが、これで『里人談』・『俗諺志』序跋の言がおよそ裏付けられるのである。

五

沾涼の説話集には、自身による取材が元となっている話があることを確認した。しかし、その方法を以つて全国を網羅することは不可能であることは言うまでもない。それでは、沾涼は自らの行脚のほかどのように地方と関わりをもつたのであろうか。

沾涼は俳諧宗匠である(享保十二年立机)。まず、当然考えられるのは俳諧の人的ネットワークの活用であろう。俳諧と説話の近接について飯倉氏は

俳諧と教訓の意外な近さは、やはり俳人である菊岡沾涼の啓蒙的著述『本朝世事談綺』にもうかがうことができ

る。そもそも俳諧の宗匠たる者は、俗諺（すくげん）に詳しく、故事に明るく、古典に精通していなければならなかつた。また、沾涼の実際は知らず、諸国行脚（あんま）をする俳人たちは当然のごとく説話収集者にもなりえたはずである。これが後に述べる「奇談」の流行と密接に関わってくる。

（前出）「奇談から読本へ」

と述べられ、説話との近接だけでなく、享保当時の啓蒙・教訓の流行や浸透に俳諧が一役買っていたことを指摘されている。そして、氏はその典型例として常盤潭北なる俳人に着目し、その俳諧活動と教化運動の関連について詳述されている。それによれば、「潭北の教化活動地と、彼の俳友の分布状況とは、かなり重なっているということであり、類推を恐れずにいえば、実際にはほぼ一致していた」らしく、潭北が積極的に地方へ足を延ばしていた様が窺える。

潭北の如き沾涼と同時代の、それも俳壇においては決して主導的立場にあつたとは言えない江戸座の俳諧師がこのような活動をしていたのであれば、沾洲ら主流派から疎んぜられていたとおぼしき沾涼（あ）であっても、地方に俳諧ネットワークをもっていたとしても何ら不思議ではない（否むしろ親藩門的姿勢を見せ、江戸の俳壇では孤立していた形跡のある沾涼であれば、地

方にこそ活路があつたのかもしれない）。

実際、その俳書作品たる『綾錦』（享保十七刊）や続編『鳥山彦』を検するに、地方在の門人が複数見える（南花（越前）・東訖（伊勢）・乙風（甲斐）・左隣・沾雪（ともに豊後））。

また、門人ではないものの、沾涼がその俳諧活動の初期にものした絵俳書三部作（『百福寿』（享保二刊）・『続福寿』（享保五刊）・『百華夷』（享保八刊）の三書）にも地方俳人が名を連ねている。今、その在地を人数順に記せば左の如くである。

上野	松井田	十一名
下総	結城	八名
常陸	水戸	五名
奥羽	白川	三名
信濃	松本	二名
下野	宇都宮	二名
	京都	二名

奥羽	岩城	各一名
下野	烏山	
上野	安中	
下総	開宿	
下総	佐倉	
甲斐		
伊勢	津	
近江	大津	
越前	鯖江	
紀伊		
和泉	堺	

これらの俳人たちとは何らかの交流があったと考えられ、俳諧師としての交わりの傍ら、その地方に伝わる民話などを収集していたということは、充分考えられることである。また、特に人数の多い地域には、直接足を運んだということも推測しうる。

中でもとりわけ人数の多い松井田と結城は、先に述べた潭北の教化活動の拠点である〔百華実〕⁽²⁾には潭北門の千之が入集しているが、潭北は沾涼の俳書に軒並み入集しており〔百華実〕・〔綾錦〕・〔烏山彦〕、立机の際の万句興行にも連座してい

る〔綾錦〕上⁽¹⁾ことなどを考慮するに、浅からぬ関係があったと思われる。松井田・結城からの入集者が多いのは、この縁によるものであろうか。

ここに挙げた地方俳人との交流が、説話収集の一助となつたという直接の例は示すことができないが、『里人談』巻之五「宗語狐」には、「路通の直談、その詞をその儘にあらはし侍る」と、この話が蕉門俳人八十村路通からの聞き書きである旨が記されており、かかる例がその他の俳諧師との間にもあったかという推測を可能にするもので、大変興味深い一文である。

また、前章で信州姨捨山に赴いていたと述べたことに関連するが、沾涼が諏訪の俳壇と密接な関係をもっていたことを指摘する必要がある。

信州諏訪には享保期に藩主諏訪蘭幽や、醸造業を営む銭屋の河西周徳を中心とした俳壇があり、江戸座の俳諧師との交流が盛んであった。⁽²⁾沾涼も点者としてこれに関わつてきたことが、現存する俳諧点巻七点（いずれも元文）延享にかけてのもの〔図3〕から判明する。点巻に附属する封紙の記載事項から察するに、おそらく飛脚を介してのやり取りであったはずで、直接訪れる機会があったかどうかはわからないが、この

人脈を利用した説話収集、たとえば地方俳人のものした地誌的作物を借用して自著に應用するなどということも、可能性としてはあつたとみてよいのではなからうか。

結語

菊岡沾涼による説話作品、『諸国里人談』・『本朝俗諺志』の、他の類似書では得がたいそのへ地誌性という特色は、見てきたような取材方法・方針にその一因があつた。すなわち、自ら訪れた地における名所・旧跡の由来などをつぶさに記録し、駕籠かきなどから話を聴取し、俳友たちから情報を得たりした上で、それを編集したのであつた。尤も全話の典拠が判明しているわけではなく、中には実見するのではなく文献に拠つた話もある⁽²⁾。それでも、沾涼の事実性にこだわるといふ姿勢は、いささかも色あせるものではない。

そもそも地誌というものは、言わば大小の説話の集積という側面もあるのだから、説話集に地誌の要素が見られるといふのは至極当然とすることもできる。ただここで強調したいのは、そのことによつて、すなわちへ地誌性⁽³⁾を帯びることによつて、『里人談』・『俗諺志』の情報としての客観性・具

体性が強まっているという事実である。だからこそ、後に多くの作品に典拠として利用されることになるのであろう⁽²⁾。

そして、四章で確認した如く、著者沾涼は取材・収集した話を板本化するにあつて主観的な批評や教訓的な言辞、或は文学的作為をほとんど加えていない。これは既述したように、作品全体に指摘できる傾向であり、同時期の説話集や怪異小説との大きな相違点であると同時に独自性でもあるのである。

それでも「語り」に重きを置いたへ綺ある談⁽⁴⁾（奇談から読本へ）としての「奇談」書群に含まれるのは、かかる編集方針、すなわち話や情報に華美な装飾を施すことなく、ただ提示するということが客観性を内包し、その客観的な情報の類聚が結果として、啓蒙性を帯びたからであらう。池田屋源助という、『蛙の物真似』（克齋著、享保十四刊）・『風俗遊仙窟』（同著、享保十七刊）といった文学史上無視できぬ価値をもつた教訓読本の類を中心に刊行し、江戸の教訓読本流行の一股を担つていた書肆にその価値を認められていたことがその証左である。

この後、宝暦期には編集方針や内容が酷似した追隨作が現われる。大膳東華著『斎諧俗談』（玉曆八刊、江戸板）・矢嶋首

甫著『本朝国語』（宝曆十三刊、大坂板）がそれで、どちらも本文中に典拠として『里人談』・『俗諺志』を挙げており、『本朝国語』は序文において『里人談』・『俗諺志』を先行書として意識している旨をはっきりと示すなどしている。榎澤葉子氏によれば、大坂の書肆吉文字屋市兵衛が板元である『本朝国語』は、『里人談』・『俗諺志』のほか神田養勇軒編『新著聞集』（寛延二刊、江戸板）や『斎諧俗談』などの江戸板の奇談本を強く意識して成立しているが、この傾向は明和・安永期にまで及ぶという。上方に強い影響を及ぼした「江戸板の奇談本」の中で沾涼の作品は最も早い時期のものであり、この東西の逆転現象（享保以前は怪異說話集の出版は上方中心であった）の火つけ役の一つであったとすることができ、この点においても重要な作品である。

享保・宝暦期は幕府主導の学問奨励・庶民教化の政策もあり、また、朱子学的道德の呪縛から脱し、広範な分野への学問的追及を肯定した徂徠学の席卷²³などもあって、人々の知的好奇心や「事実」を求める風潮が一層強まっていた。幕府が諸国の産物や本草などを調査しそれらを集成させたのは（植村政勝撰『諸州探葉記』（享保十一成）・『産物帳』（元文三成）・『産物絵図帳』（同）・丹羽貞機ら編『庶物類纂』（延享四成）など）、その表れ

の一つといえよう。そして、説話にしても自づから中世以前とは様相を異にして、教義・教訓の枠組を残しながらも「実話」への希求が高まっていたのである。

吉宗の庶民教化奨励政策に呼応して教訓・教戒をこととする談義本が生まれたように、為政者のこの動きと、その余波としての諸国への民衆の関心の高まりが、沾涼をしてこの時期に諸国ものでも言うべき『里人談』・『俗諺志』の如き書を著さしめたと言うこともできる。すなわち沾涼の説話作品は、当時の主流たる談議本やそれに準ずる奇談集に見られるようなことごとしい教訓の言辞こそ無いけれども、一方において、やはりこの時期から沸き起る徂徠学にみるような即物的志向の典型的な産物だとも言えるのである。そして、その即物的表現を裏側から支えていたのが、彼の地誌応用による説話作法だったのであり、そのことこそが、既存の説話集なども利用しながらも、単なる二番煎じに墮すことなく、追従作までも生み出すに至るような独自性を付与したと言えるのではなからうか。

付記

本稿は、二〇〇八年度成城国文学会年度大会（二〇〇八年七月

六日 於成城大学)における口頭発表をもとに再構成したものです。
席上、貴重なご指摘・ご指導を賜りました後藤昭雄先生・小島孝之先生・宮崎修多先生に心より御礼申し上げます。
また、図版の掲載を許可していただいた杏雨書屋・諏訪市博物館、ならびにご尊父のご論考からの転載をお許し下さった山本高行様に深謝申し上げます。

(ましま・のぞむ 成城大学大学院博士課程後期)

注

- (1) 飯倉洋一氏の一連の御研究による。後述の論考や、「奇談」の場(「語文」第七十八輯(大阪大学国語国文学会、二〇〇二年五月三十一日))、「奇談」史の一鱗(伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法』(和泉書院、二〇〇四年三月))などを参照。
- (2) 沾涼の俳諧活動などについては、以下の小論を参照された。
い。拙稿「菊岡沾涼の俳諧活動」(成城国文学会編(兼発行)『成城国文学』20(二〇〇四年三月二十三日))
・同「菊岡沾涼『綾錦』の成立と諸本(板本と写本と)」(俳文学会編(兼発行)『連歌俳諧研究』第百十二号(二〇〇七年三月一日))
・同「菊岡沾涼の絵入俳書」(成城国文学会編(兼発行)『成城国文学』24(二〇〇八年三月二十三日))
(3) 水谷不倒著『選擇古書解題』(奥川書房・釣之研究社、一九二七年十一月。のち同氏著『水谷不倒著作集』第七卷(中央公論社、一九七四年十月)所収)。
- (4) 中村幸彦「樊噲——春雨物語小論」(京都大学国文学会編『国語国文』第二十一卷第十号(中央図書出版社、一九五二年十一月十五日))、のち同氏著『中村幸彦著述集』第三卷(中央公論社、一九八三年五月)所収。
(5) 尾形仿「中国白話小説と『英草紙』」(『文学』34・3(岩波書店、一九六六年三月十日))。
(6) 中山右尚『『金紙屑』上冊の素材二点——「西鶴織留」と「諸国里人談」——(柳門舎編(兼発行)『江戸時代文学誌』第三號(一九八三年六月三十日))。
(7) 三好修一郎「解題」(小池正胤・叢の会編『江戸の絵本』Ⅲ(国書刊行会、一九八八年六月)・丹和浩「黒本『經曾我旧跡』について」(近世文学研究「叢」の会編「叢」第十三号(小池正胤、一九九〇年七月))・同氏『『牡丹陸奥壺碑文』について』(丹陽子ら編『初期草双紙の翻刻・内容分析による近世期の子供の文化の研究』(黒石陽子、二〇〇二年三月))・山下琢巳「殺生石水晶物語について」(昭和六十三年度科学研究費による『江戸時代の児童絵本の調査分析と現代の教育的意義の関連の研究』報告書(一九八九年二月))・同氏「ふる竹角田」について(『叢』第十三号)など。
(8) 今井秀和「片輪車という小歌——妖怪の母体としての言語——」(大東文化大学日本文学会編(兼発行)『日本文学研究』第四十六号(二〇〇七年二月十五日))
(9) 中野三敏編『日本の近世』12(中央公論社、一九九三年五月)所収。
ただし、この文章のみでは「里人談」のいかなる点から「知識啓蒙を織り込んでいる」と判断されたのかわからないが、もし、その文章中に明確に啓蒙性が見られるということであれば、前述の通りこの点については、論者は見解を異に

- している。
- (10) 特に再板本には、管見の限りでは江戸須原屋平助による初印(早印か)本の他に、大阪(阪)は原本の通り。以下同様。豊田屋右左衛門ほか六肆本、大阪象牙屋次郎兵衛ほか六肆本、京都勝村治右衛門ほか六肆本などの後印本がある。なお、いまだ調査が不十分なため、「里人談」・「俗諺志」ともに、詳細な書誌事項の整理は他日に譲る。
- (11) 「里人談」の引用は、『日本随筆大成』第二期十二卷(其刊行会、一九二九年一月)に、『俗諺志』は山下琢己『本朝俗諺志』一翻刻と改題(『東京成徳短期大学紀要』24(一九九一年三月二十四日))にそれぞれよった。ただし、あえて原本によった箇所もある。
- (12) たとえば「巻は十餘り談は数百条。皆近世の事實なり」(静観房好阿著「諸州奇事談」(寛延三跋刊)跋)や「其今の人の怪き事の実事なる物をとつて」(『古今百物語』(寛延四刊)序)。
- (13) この他にも同様の例が『大和怪異記』(宝永六刊)・祐左著『太平百物語』(享保十七刊)・慙雪舎素及著「怪談登志男」(寛延三刊)などに見られることを前出飯倉氏が指摘されている(前出「奇談から読本へ」)。
- (14) この時期のものでは、椋梨一雪著「統著聞集」(宝永元序)を再編集した神田養勇軒編「新著聞集」(寛延二刊)に分類が見られる。ただし、元となった「統著聞集」にも見られる処置であり(田中葉子「新著聞集」の成立―「犬著聞集」「統著聞集」との関連から―(九州大学国語国文学会編「語文研究」第六十二号「九州大学文学部国語国文学研究室、一九八六年十二月十日」)、その分類項目も「忠孝」「慈愛」「酬思」など、人間のありように関るものが多い。
- (15) 神谷勝広著「近世文学と和製類書」(若草書房、一九九九年十一月)。
- (16) 近藤瑞木「写本から刊本へ―初期読本怪談集成立の側面―」(東京都立大学国語国文学会編(兼発行)「都大論究」第三十三号(一九九五年六月三十日))
- (17) 論者は実見できていないため、書誌事項や本文については、山本茂貴「伊賀に伝存する菊岡沾涼自筆「故郷の水」の稿本について」(沖森直三郎編「伊賀郷土史研究」第六輯(伊賀郷土史研究会、一九七四年十一月二十五日))によった。ただし、引用の際誤字と思われる箇所は訂正した。
- (18) 国書刊行会編(兼発行)「続燕石十種」(一九〇九年三月)による。
- (19) 引用に際しては、私に句読点を補った。
- (20) 兼登校注「享保俳諧集」へ古典俳文学大系11(集英社、一九七二年三月)による。
- (21) 実際にその地を訪れたのか確証は得られないが、「すまにて/手ごろなるつりがね草やつはもの、沾涼」(「里人談」巻之五「須磨寺鐘」)・「先年・産行の事にて、暫大坂に足をと、む折ふし」(「俗諺志」巻之二「齒の神」)・「其年予上京し、南都へ立越けるに」(「同」巻之三「春日靈験」)などの言が散見する。
- (22) 飯倉洋一「常盤潭北論序説―俳人の庶民教化―」(柳門舎編(兼発行)「江戸時代文学誌」第八號(一九九一年十二月二十五日))。
- (23) 注2「菊岡沾涼の俳諧活動」を参照されたい。
- (24) 「百福寿」には地方在住と明記される入集者がいないため、数値は「続福寿」・「百華実」を集計したものによる。なお、「下野烏山」の一名は潭北である(「百華実」)。

(24) 同注21。

(25) 安藤武彦「元禄前後の信州諏訪俳諧について」(其編集委員会編「園田学園女子大学論文集」第二十四号(一九九〇年三月二十日)、後に「徳元と信州諏訪俳諧—江戸座の流行—」と改題して同氏著「斎藤徳元研究」上(和泉書院、二〇〇二年七月)収録)・其編集委員会編「諏訪市史」中巻(諏訪市、一九八八年三月)。

(26) 「里人談」・「俗諺志」には何箇所か説話の典故を明示したところがあり、孤山居士編「本朝語園」(宝永三刊)もその内の一書である(「里人談」巻之二「成大会」)が、明記されたもの以外にも、これに拠ったかと思われる話が確認できる(「里人談」巻之一「直会祭」・「筑摩祭」・「三猿堂」)。

また、須田千里氏の指摘されるように、「里人談」には、直接の典故と言い得るかはなお、検討を要するものの、著者不詳「本朝故事因縁集」(元禄二刊)や厚督春鶯著「扶桑怪談弁述鈔」(寛保二刊)と共通する話が確認できる(日野龍夫編「京都大惣本稀書集成」第八巻(臨川書店、一九九五年九月)解題)。

その他、同じく春鶯著「本朝怪談故事」(正徳六刊)にも複数の類似する説話が見られるなど、これら漢字片仮名まじりの類書や仏教観化ものに拠っていた側面があると言いうことのできる。

(27) 樫澤葉子氏は、「本朝国語」と「新著聞集」において、近世を代表する説話作者たる椋梨一雪の説話が典拠として可能になった一つの要因として「犬著聞集」から「続著聞集」への説話の客観化が考えられると指摘されている(九州女子大学国語国文学会編(兼発行)「語学と文学」第30号(二〇〇〇年三月十八日))。

(28) 中野三敏「文運東漸の一側面」(岡一男編「国文学研究」第二十八集(早稲田大学国文学会、一九六三年九月二十日)、後に同氏著「戯作研究」(中央公論社、一九八一年二月)に収録)。

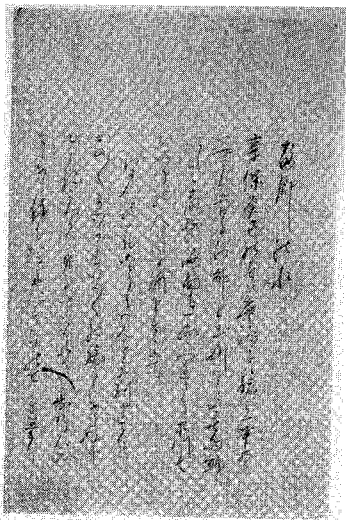
(29) 前掲樫澤氏論文(注27)。また、田中葉子「怪談名香富貴玉」再考「明和期における怪談集の一動向」(九州女子大学国語国文学会編(兼発行)「語学と文学」第21号(一九九一年三月一日))。

(30) 丸山真男著「日本政治思想史研究」(東京大学出版会、一九五二年十二月)は、湯浅常山著「文会雜記」(天命二序)に見える祖徠に関する「徠徠ハ諸國ノ咄シ、色々ノコト、人ノ語ルヲ随分心ヲトメ聞レシト也。歿後箱ノ中ニ状ウラヤ、反古ナドニ、サマザマノ咄ヲ廣間ナドニテ聞タルトテ書分置レタルヲ尋出シタルト也」という記事を引いている。

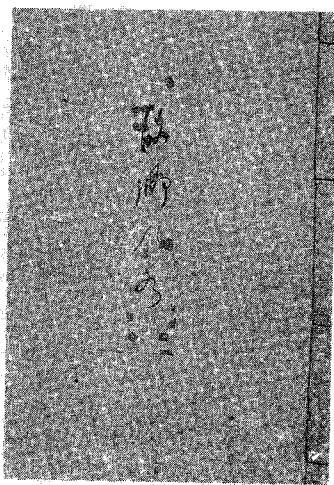
(31) 福井保著「江戸幕府編纂物解説編」(雄松堂出版、一九八三年十二月)。

(32) 前掲「諸州採葉記」が後年「本朝奇跡談」(安永三刊)として刊本化されていること(坂坂耀子「採葉記」の世界」(福岡教育大学編(兼発行)「福岡教育大学紀要」第三十八号(第一分冊文科編)(一九八八年二月十日))。或はもと「向燈賭話」(中林滴重著、元文四序)なる写本小説であったものが、手を加えられて出刊する際に、「諸州奇事談」と書名を改められたこと(注15)。また、その出版者が須原屋平左衛門であり、同書肆が前述の如く「里人談」・「俗諺志」の刊行にも携わっていることなども、かかる傾向のものが人々の好評を得ていたことを示しており、「里人談」・「俗諺志」もその流行の中で位置付け得ることを示唆している。

(山本茂貴「伊賀に伝存する菊岡沾涼自筆『故郷の水』の稿本について」より転載)



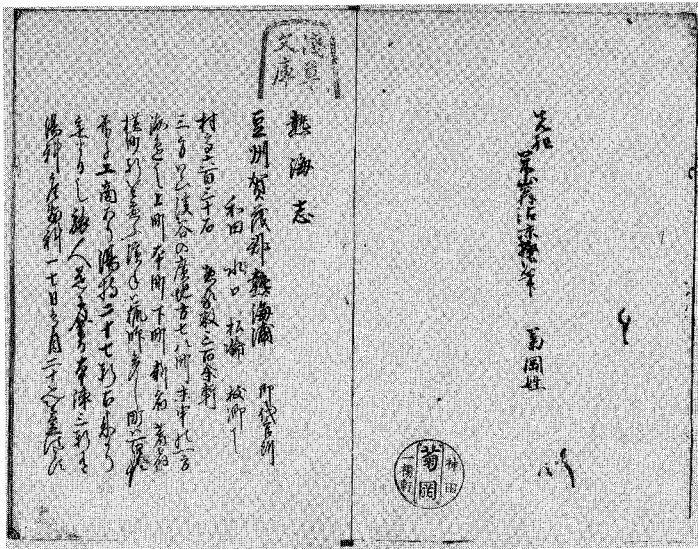
『故郷の水』巻頭



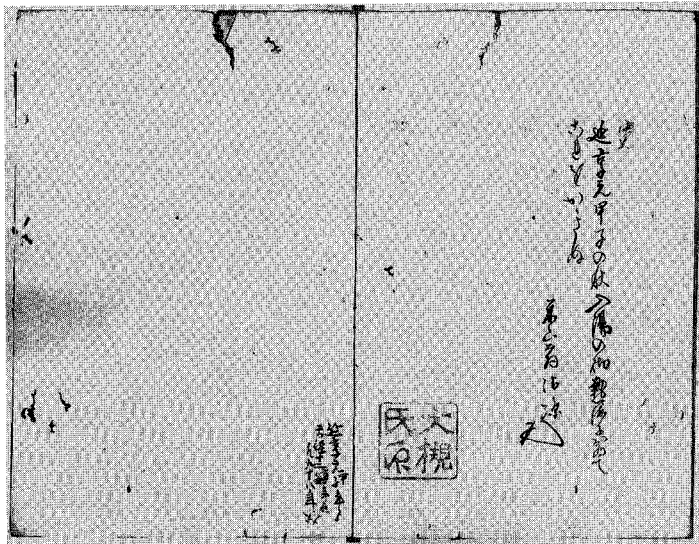
木津保之氏旧蔵『故郷の水』表紙



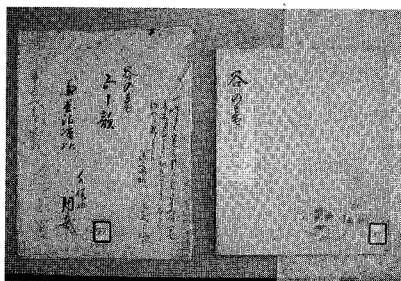
武田科学振興財団杏雨書屋蔵『熱海志』表紙



『熱海志』 卷頭



『熱海志』 奥書・識語

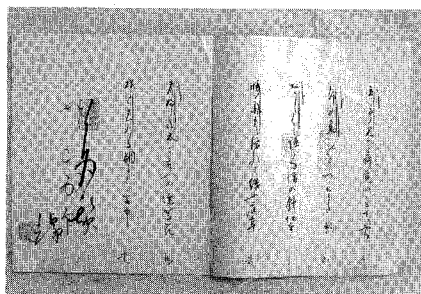


諏訪市博物館蔵『谷の音』表紙・袋
(封紙か)

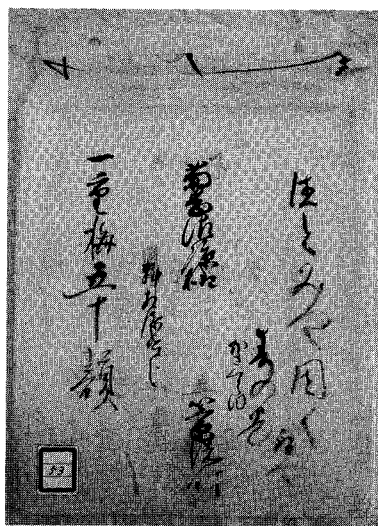
67	66	60	59	53	52	741 151	図書番号
(不明)	(不明)	延享2・6	延享1・12	寛保2・2	寛保1・10	元文6・2	年月
旭山	霜落葉	蚊帳さらし	山茶花	一重梅	落葉	谷の音	書名
五十韻	五十韻	五十韻	五十韻	五十韻	五十韻	五十韻	
一簣亭 七	周哉亭 六	一簣亭 八	會隆亭 八	一簣亭 八	一簣亭 八	周哉亭 七	催主

諏訪市博物館蔵 菊岡沾涼点「俳諧
点巻」目録

(安藤武彦「徳元と信州諏訪俳諧——江
戸座の流行——」所載の目録による)



諏訪市博物館蔵『旭山』句締



諏訪市博物館蔵『一重梅』袋 (封紙か)